縮小社会研究会　第 27 回研究会（2015 年 3 月 1 日）

森と水と土　～環境保全と資源利用のバランスを考える ～

谷　誠 （京都大学 農学研究科 森林水文学分野）

講演概要

縮小社会を実現するには、目前の欲求と将来に明らかになってくる環境劣化を結びつける視点が必要です。そのためには、社会を取り巻く自然環境なるものが、地球の気候や地殻変動活動に対して生態系が相互作用を為し、動的平衡を維持しているとの科学的知見に気づき、共有することがたいへん重要です。

自然科学は、人間の欲求を満たす技術に貢献します。しかし、動的平衡を突き崩して変化させる地球の活動があること（時間的に多様なスケールを持つ種々の変動が入れ子を為しています）、さらに、人間欲求に基づく人間活動のありかたで動的平衡を維持できたり、破綻させたりする事実も教えています。

そこで、生命体の集合である生態系が恒常性を維持しようとして地球変動に働きかけ、その相互作用の結果獲得されている環境の動的平衡をできるだけ長く維持させることが必要です。しかし人間社会の対策としてどのように具体化するか、という課題は、縮小社会がどのようにして実現できると似て、現在の社会では、実際問題、非常に厳しいように感じます。

この問題点を、浜先生の話された、経済成長の終わった大人の時代の経済学に必要な視点「人の痛みを理解し冨の配分を見直す」に対応して言えば、「将来の世代の環境劣化を科学的に理解し、目の前の欲求のあり方を見直す」ことになると思います。この観点はどちらも、「すべて人間は他の生物同様、平等に死を迎えるが、そのことを他の生物とは違って人間は意識することでき、欲求行動を制御する（他の生物は直前の欲求に順いながら、生態系の一員としての役割を意識せずに果たしています）」、こうした、まさしく「大人の態度」から生まれるのだと思います。環境の場合も地球変動と動的平衡を保つのですが、それは時間の問題で、より強大でかつより時間スケールの長い現象によって変化させられてゆきます。逆説的ですが、必ず死亡すると認識しているから個人が自主的に疾病治療や禁煙に取り組むのと同様、今の環境

は終わりになることを痛感するからこそ、環境を維持延命させる対策が治癒として納得され現実的になる（環境が変化しないなら延命対策する気にはならない）のではないでしょうか。

浜先生の指摘された大人の経済学では、「己の欲するところに順へども矩を超えず」がキーワードのひとつでしたが、直前の欲求と痛みをもった人、あるいは安定した環境を失うであろう将来の世代を分け隔てしない「無分別」の境地を、孔子のような偉い人だけでなく、社会が共有することが望まれるわけです。これは、富の配分にも、環境問題を身近に引き寄せるためにも必要だと思います。その社会的実現は、農林水産業にかかわって誇りをもって生活することが過去のことではないこと、生態系に食料・生活と環境を依存することは「通歴史的」であること（植林しても孫の代にしか木材が収穫できないことは、生物の自然性によるものであって、今も昔とまったく変化ありません）を強く社会的に意識することでしか実現しないように思います。

経済成長を高るため、「より便利に快適に」への欲求を刺激する技術だけが自然科学の役割であるような科学技術・教育政策、いわば「アホニクス」を、「人間に不可能なことは何か」をも共有する教育研究に変えてゆく、ことも重要だと思います。それが理解される素質が日本の社会に消えていないことを信じたいと思います。